

# 身体障がいを持つ学生が参加可能な体育実技の授業展開の試みとそれに対する受講生の反応について

兵頭 圭介\*、鈴木 明\*\*、只隈 伸也\*\*\*

\* 大東文化大学 名誉教授

\*\* 大東文化大学 スポーツ・健康科学部健康科学科

\*\*\* 大東文化大学 スポーツ・健康科学部スポーツ科学科

## A trial for integrated physical education course in Daito Bunka university

Keisuke HYODO, Akira SUZUKI, Shinya TADAKUMA

### Abstract

Handicapped student and non-handicapped students took a physical education course (badminton) from April 2015 to January 2016 in Daito Bunka University.

Both handicapped student and non-handicapped students got a good experience in this physical education course. It is concluded that this physical education course provided an experience of inclusive collaborative sports activity to handicapped student and non-handicapped students.

キーワード：大学教育、体育実技、身体障がい者スポーツ、インクルーシブ教育

### はじめに

日本では江戸時代、寺子屋で障がい者を受け入れていた事実が確認されるなど、障がい者教育は明治時代以前にその端を発するようである（後藤、2016年）。第二次大戦後特別支援学校制度の充実により、体育実技を含む障がい者を対象とした教育は施設、教材、指導法等飛躍的な発展を遂げた。障がい者の大学進学も増加の傾向にあり、平成26年の大学等進学者数（大学・短期大学の通信教育部への進学者数を含む。）は、428人（全卒業生数に占める比率2.1%）である（文部科学省、2015年）。多くの大学・短期大学と同様に本学も、障がいを持つ学生が支障なく学生生活を送れるように努力している。こうした取組みを維持発展させる上で、障がいを持つ学生を受け入れた授業の事例について記録を残すことも重要と思われる。今回、1年次配当の体育実技科目において障がいを持つ学生と健常学生が共に履修するクラスを担当する機会を得たので、プライバシー保護に留意の上で、その授業運営の実際と受講生の受け止め方について報告する。

## 対象と方法・結果

**当該学生：**下肢に先天的障がいを持ち、通学など移動は電動車椅子を使用。上肢・体幹の障害は認められなかった。特別支援学校高等部を卒業。本学N学科に入学した。1年次配当の体育実技（総合体育）履修を希望したため、本人の希望と他教科科目履修との兼ね合いから「バドミントン」の種目を履修することになった。電動車いすは体育館での実技に適さないと判断されたため、当該学生が通学していた特別支援学校に車いすを納入していた株式会社ドルフィンの仲介によりオーエックスエンジニアリンググループ製造の軽量車椅子 OXMR を購入、実技に使用した。

バドミントンについて当該学生は、特別支援学校在学時にシャトルの代わりに風船を用いる「風船バドミントン」を経験済みであった。しかし風船とシャトルでは飛翔特性が大きく異なるため、当該学生に対して、中学・高校時代にバドミントン競技を経験した者（経験者）のグループに入って練習を行うよう指示した。ラリー練習の際、当該学生にはネットの近く、フロントバウンダリーライン付近に位置して、自分の体近くに来たシャトルをラケットに当てることを指示、相手をする経験者には当該学生のラケット面を狙ってゆるいストロークでシャトルを打つよう指示した。このような条件下でも、当該学生にとっては初めて経験するシャトルの動きに対応することが困難だったようで、ラケットにシャトルが当たる確率は半分程度であった。そこで、シャトルの動きになれる目的で、毎回の実技時間中20分以上、以下の様な方法でサービスの練習を行った。

壁から1m程度離れた所に位置してバックハンドからサービスをする。はじめはシャトルをラケットに乗せる形でラケットを押し出す動きでシャトルを飛ばす感覚を覚えてもらい、なれるに従ってシャトルをラケット面から離して正規のサービスが打てるようにした。この練習を1ヶ月ほど行くと、ラリーでシャトルを空振りすることが少なくなった。

本学におけるバドミントンの体育実技ではコート6面を使用する。そこで今回のクラスでは、当該学生を含む受講生全員を12のグループにわけ、2グループづつ6組に分けてコートを割り当て、毎回異なったグループと組んで、同じコートで練習や試合ができるようにした。これにより当該学生が履修したバドミントンのクラス全員が一度は当該学生と同じコートに入って練習や試合に参加したことになる。

実技授業の最終回に図1の内容で今回の授業についてアンケートを行った。内容は、今回の体育実技に参加する以前に障がい者と一緒にスポーツを行った経験があるか、過去に障害者との交流があったか、障がい者が大学で体育実技を履修する際どのような形態が望ましいか（障がい学生だけで特別クラスを編成、障がい・健常学生と一緒に実技を行う、実技を免除してスポーツ系の講義科目を履修させる、の3つの選択肢を提示し好ましいと思う順に順位をつけてもらう）、の3点について無記名で回答してもらった。

アンケート結果については表1に示すとおりである。今回の体育実技に参加する以前に障がい者と一緒にスポーツを行った経験については「ない」と回答した者が28人(65.1%)と「ある」(15、34.9%)の倍近くなった。スポーツ以外のものも含めた障がい者との交流の有無については半数近くの20名(46.5%)が「ない」と答えたが、「イベントなどで時々交流」も18名(41.9%)とほぼ同数で、「日常的に交流」は5名{11.6%}であった。障がい学生が体育実技を履修する方法については、3つの選択肢の中で、「障がい・健常学生と一緒に実技を行う」については優先順位1

図1 ●曜×限 総合体育 AB (バドミントン) に関するアンケート

●曜×限 総合体育 AB (バドミントン) に関するアンケート

今年度の●曜×限総合体育 AB (バドミントン) では障がいのある学生と健常な学生が交流する形で実技を行いました。今後の参考といたしますので以下の質問にお答えいただき、あなたの御意見を頂戴いたしたく存じます。ご協力お願い致します。

1) 今回のように障がい者・健常者が一緒になってスポーツを行った経験が以前にもありますか？当てはまる記号を○で囲んでください。

A) 過去にも障がい者・健常者が一緒に参加するスポーツ活動を体験した  
 B) 障がい者・健常者が一緒に参加するスポーツ活動は今回が初めて

2) 障がいのある学生が体育実技の単位を履修する方法として、以下の3つのうち、あなたが好ましいと考える順に文末の( )内に数字を入れてください。

障がい者だけのクラスを編成し、実技授業を行う ( )  
 障がい者と健常者が一緒になってクラスを編成し、実技授業を行う ( )  
 実技授業は免除し、代わりにスポーツ関連の講義科目を履修させる ( )

3) 大学入学以前の障がい者と健常者の交流についてあなたに当てはまるものの記を○で囲んでください。

A) 家族や同級生として日常生活の中で交流があった  
 B) 学校や地域のイベントで時々交流があった  
 C) ほとんど交流がなかった

今回の総合体育について、障がい者と健常者の交流の観点から、感想・意見・提案など自由にお書き下さい。(裏面記入可)

表1 アンケート集計結果

障害者とスポーツをした経験	
a: ある	15 (34.9%)
b: ない	28 (65.1%)
総計	43

大学入学以前の障がい者との交流	
a 日常生活の中で交流	5 (11.6%)
b イベントで時々交流	18 (41.9%)
c ほとんど交流がなし	20 (46.5%)
総計	43

障がい学生の体育実技単位履修方法

選択肢	優先順位	回答数
障がい者だけの特別クラスを編成	1	7 (16.3%)
	2	19 (44.2%)
	3	7 (16.3%)
	無回答	10 (23.3%)
総計		43 (100%)
健常者と一緒の実技を行う	1	28 (65.1%)
	2	9 (20.9%)
	3	3 (7%)
	無回答	3 (7%)
総計		43 (100%)
実技を免除して座学で単位を出す	1	5 (11.6%)
	2	5 (11.6%)
	3	23 (53.5%)
	無回答	10 (23.3%)
総計		43 (100%)

位に選択したものが最も多く28名(65.1%)、「障がい学生だけで特別クラスを編成」は2位が一番多く19名(44.2%)、「実技を免除」は3位が一番多く23名(53.5%)であった。

### 考察とまとめ

近年、新しい公共の建物にエレベータ設置を義務付ける、公共交通機関における低床車導入等、障がい者が自宅や施設外で活動しやすい環境が、まだ不十分ではあるが、徐々に整えられてきていると思われる。公教育においてもボランティア活動をカリキュラムに取り入れるなどにより、健常者が障がい者と交流する機会も以前と比べて増えてきていると思われる。今回のアンケートでも、大学入学前に障害者と何らかの交流を経験している者は過半数には達しないものの、一定の割合を占めたことは、上記の推察を裏付けるものであろう。

障がい学生が体育実技を履修する方法のうち、「障がい学生だけで特別クラスを編成」する方法は一部の国立大学において行われてきており(黒田ほか、1988年)、孤立しがちな障がい学生同士が交流できる、等のメリットはあるものの、体育施設や人的資源に余裕がないと実施困難であると思われる。また、障がいの内容と人数によっては履修者1名のクラスになってしまい、結局は「障がい・健常学生と一緒に実技を行う」形態をとった例もある(青山ほか、1989年)。「実技を免除」する形は大学側にとって一番負担の少ない方法であるが、「スポーツをする権利」「スポーツを楽しむ権利」の保証という面で好ましくない。

今回のアンケート結果では、「障がい・健常学生と一緒に実技を行う」が優先順位1位、「障がい学生だけで特別クラスを編成」が優先順位2位、「実技を免除」が優先順位3位となった。この結果は、受講生が、スポーツをする権利は障がいの有無にかかわらず保証されるべきことを理解し、今回の「障がい・健常学生と一緒に実技を行う」実技の形態を支持したことを反映している、と判断できると思われる。また、図2に示すように、当該学生自身の感想文からも、今夏の授業形式を積極的に評価していることが推測できる。

後藤邦夫は、「インクルーシブ(inclusive::包括的)教育」という表現を用いて健常者と障がい者が共にスポーツ活動を行うことが理想的であると述べている(後藤、2016年)。

今回当該学生が履修した総合体育のクラスにおいては不十分ながらこの「インクルーシブ(inclusive::包括的)教育」が実践されたことがアンケート結果から判断できる。

本学の保健体育実技授業においてはこれまでも、基礎トレーニング(主にトレーニングマシンを用いて実技を行う)や卓球、水泳などの種目を中心に障がいを持つ学生を受け入れてきた。また、10年ほど前からはペタンク・ボッチャなど障がいを持つ学生でも参加しやすい軽スポーツを中心に展開する種目(ニュースポーツ)も開設されている。今回スポーツ用車いすを導入することにより、障がいを持つ学生が参加可能な種目の範囲が広がり、本学の保健体育実技授業における障がいを持つ学生の受け入れ態勢がより充実したものになったと結論できる。

なお、今回当該学生が使用した軽量車いすの購入には、大東文化大学一般研究費による補助を受けたことを付記する。

図2 ●曜×限 総合体育 AB(バドミントン)を履修した障がい学生の感想文

障がい者である私が健常者と一緒になって体育の授業を受けられたことをとても嬉しく思う。身体障がい者はどうしても日々の運動量が少なくなってしまうので、体育の実技は体を動かすいい機会になったと思う。私は高校での3年間、障がい者しかいない、という状況で体育の授業を受けていたが、それではやはり小さな集団の中での活動となり、交流の輪を広げにくいと感じた。私が皆と一緒に授業を受けることによって、障がい者と接点を持っていなかった人が、障がい者について理解しようとしてくれるきっかけになれていったらいいなと思う。

#### 参考文献

後藤邦夫編著、特別支援教育時代の体育・スポーツ 動きを引き出す教材 80、第1章1

文部科学省、学校基本調査 2015年

障害者体育の歴史、大修館書店、2016年

黒田善雄、中嶋寛之、川原貴、山田茂、兵頭圭介 『見学をへらす実践－東京大学の事例より－』 体育の科学、杏林書院、1988年3月号

黒田善雄、渡辺融、中嶋寛之、川原貴、山田茂、兵頭圭介 『整形外科的疾患を持つ学生のための体育実技の方法について』 - その2、4 脳性マヒによる下肢障害をもつ学生の事例について、東京大学教養学部体育学紀要 22、1988年

青山昌二、中嶋寛之、石川亘、川原貴、山田茂、兵頭圭介 『『身体障害を持つ大学生のための体育実技に関する事例報告－視覚障害者（盲人）の事例について－』 東京大学教養学部体育学紀要 23、1989年

(2018年9月27日受理)